

おてら

秋彼岸法要会

九月二十日～二十六日

二十三日(木・祝)

彼岸中日法要

午前十一時より

今回はおときを中止致します

二十日(月・祝)

永代経法要

午後七時より

先祖への供養は私への供養

お彼岸中にお墓参りをしましょう

ご本尊様にもお参りいたしましょう

海

任職 蒲原 靈英

常例十六日講
毎月十六日午後一時より
お経練習・法話会
写経会
毎月第二・四火曜日
午後一時より

夏休みは午後三時半頃から子供と海に行くのが日課です。娘はプールに入ると体中が痒くなってしまうますが、海は大丈夫です。さすが母なる海です。親鸞聖人は、ご著書の中に「海」という字を多用され、その用例もバリエーション豊かです。「海」という言葉を使って、大きく分けて二つのことを表されています。まず、「一切群生海」、「生死の苦海」、「難度海」、「愛欲の広海」、「無明海」など、煩惱そのものであり、煩惱にまみれて苦しみの中で迷い続ける私たち凡夫を表しています。一方では、「弥陀の本願海」、「大信海」、「大智海」、「功德大宝海」、「誓願海」、「不可思議の徳海」など、煩惱にまみれた私たちを救ってくださる阿彌陀如来とそのはたらきを表しています。では、この「海」は別々の海なのでしようか。いえ、聖人が表された「海」は、どれもおそらく私たちが良く知っている新潟の日本海のことでしょう。

一二〇七年(承元元年)、承元の法難(後鳥羽上皇によって法然上人の門弟四人が死罪、法然上人及び親鸞聖人ら門弟七人が流罪とされた事件)によって、聖人は三十五才の時に越後国府(上越市)へ流罪となりました。京都に生まれ九才から二十年間比叡山で修行された聖人は、おそらくこの時初めて海をご覧になったことでしょう。そして、約七年間この越後の地でお念仏の教えを広められました。風いで穏やかな海、荒れ狂う冬の海、輝く海にゆつくりと静かに沈み行く燃えるような夕日など、四季折々、刻々と表情を変えてゆく海は、聖人の思想哲学に大いに影響を与えたに違いありません。

豊饒の海に感謝し、その恵みを分かち合うも、時には嵐の中でも、生活を懸けて死と隣り合わせで漁に出なければならぬ民たち。大雨の後の大量の濁流も、また海の藻屑となった者さえも、全てを飲み込み全てを洗い流して清浄となる海。毎日のようにその海を見て、その海と共に生きる民たちと語り合う中で、聖人は、この海こそが煩惱であり、私たち凡夫が生きる場所であり、同時に、それらすべてを包み込む阿彌陀如来の海でもあり、夕日の沈む水平線の向こうには極楽浄土が有ると実感されたのだと思われまます。

煩惱にまみれた私を「そのまま救うぞ」と呼び掛けてくださっている阿彌陀如来に、素直にその身をお委せしているのか、そして、「南無阿彌陀仏」と喜ばせていただいているのか。聖人が眺めておられたのと同じ海に身を浮かべながら、我が身を省みさせていただいております。

合掌



ご親教(法話)を読まれる 大谷光 淳ご門主

浄土真宗のみ教え

南無阿弥陀仏

「われにまかせよ そのまま救う」の弥陀よび声

「そのまま救う」が弥陀よび声

この愚身をまかす このままで
救い取られる 自然の浄土
仏恩報謝のお念仏

み教えを依りどころに生きる者 となり

少しづつ 執われの心を離れます

生かされていることに感謝して

むさぼり いかりに流されず

穏やかな顔と優しい言葉

喜びも 悲しみも 分かち合い

日々に 精一杯 つとめます

「浄土真宗のみ教え」についての親教

諸法無我という言葉でこの世界のありのままの
真実を明らかにされました。この真実を身をも
つて受け入れることのできない私たちは、日々
「苦しみ」を感じて生きています。このような私
たちのことを、親鸞聖人は「煩惱具足の凡夫」と
言われしました。そして、阿弥陀如来は煩惱の闇
に沈む私たちをそのままに救い取りたいと願わ
れ、そのお慈悲のお心を「南無阿弥陀仏」のお念
仏に込めてはたらかし続けてくださっています。
親鸞聖人は「念仏成仏これ真宗」(『浄土
和讃』)とお示しになっています。浄土真宗と
は、「われにまかせよそのまま救う」という「南
無阿弥陀仏」に込められた阿弥陀如来のご本願
のお心を疑いなく受け入れる信心ただ一つで、

「自然の浄土」(『高僧和讃』)
でかたちを超えたこの上ない
さとりを開いて仏に成るとい
うみ教えです。

阿弥陀如来に願われないの
ちと知らされ、その温かなお
慈悲に触れる時、大きな安心
とともに生きていく力が与え
られ、人と喜びや悲しみを分
かち合い、お互いに敬い支え
合う世界が開かれてきます。
如来のお慈悲に救われていく
安心と喜びのうえから、仏恩
報謝の道を歩まれたのが親鸞
聖人でした。私たちも聖人の
生き方に学び、次の世代の方
々にご法義がわかりやすくと
「浄土真宗のみ教え」として
味わいたいと思います。(抜粋)

新盆法要



八月八日夜七時から、護持会主催
の新盆法要が営まれました。今年も、
新型コロナウイルス感染防止の為、
参拝者を市内の方のみ一家族三名ま
でと限定し、例年よりも小規模で執
り行われました。
読経中にご法名が読み上げられる
と、参拝者が順次焼香。住職による
法話の後、記念品とお供物の下付が
ありました。尚、婦人部の方々の白
玉の振る舞いは、今年も残念ながら
中止となりました。
このような状況下でも、大切な方
を亡くされて初めてのお盆を迎える
にあたり、ご縁をいただいた皆様と
一緒にご供養ができたということ、
非常に有り難い事だったと思います。